

## 原著

# 子どもが新生児集中治療室に入院した母親の 産褥早期の愛着形成過程

高田律美<sup>1)</sup> 野本ひさ<sup>2)</sup>

1) 愛媛県立中央病院, 2) 愛媛大学大学院医学系研究科

## 抄録

本研究の目的は分娩直後に子どもが NICU に入院する母親の子どもへの愛着形成はどのように育まれていくのか、その過程に直接授乳がどう関連しているのかを明らかにすることである。調査期間は 2003 年 6 月 5 日～11 月 30 日、調査対象は公立病院で出産し、子どもが NICU に入院した母親に研究の趣旨を説明し賛同、了解が得られた母親 33 名である。調査方法は出産後 1 日目、5 日目、30 日目に無記名自記式質問紙調査を実施した。調査内容は①属性、②子どもが NICU に入院する母親の「子どもへの愛着形成」に関する質問紙 37 項目、③現在の母乳状況である。その結果、子どもへの肯定的な愛着の感情は 1 か月をかけて徐々に培われていた。特に子どもの感情を推測したり、子どもの世話に関心を向ける気持ち、あるいは母子の相互作用を形成する行動については退院から 1 か月かけて徐々に高まることが明らかになった。また「子どもへの愛着形成」と授乳形態の関係とを検討した結果、早期からの直接授乳が子どもへの愛着形成を促す効果を示していた。

キーワード：NICU、産褥早期、母親、愛着形成、直接授乳

## I. 緒言

近年新生児医療の発達により、体重の小さな児や治療を要する児に対する救命率が向上してきた。その中心的役割を担うのが主に新生児特定集中治療室(NICU: Neonatal intensive care unit)であり、低出生体重や早産児が健やかに成長することを支えている。しかしながら出産後 NICU に入院する児は必然的に母親と隔離されて治療を受けるため、母親と新生児との接触が乏しくなり、新生児・乳児期に育まれる母子間の愛着形成が阻害される恐れもある。母子にとって早期接触が必要な分娩後早期にやむなく分離され子どもへの接触を制限される中で、子どもが NICU に入院している母親はどのようにして子どもへの親和感情や肯定的認知を形づくるのであろうか。また、母親の子どもへの心理的分離がどのように時間経過にしたがい変化するのであろうか。

母子間の愛着を臨床心理学的にみるとらえ方は、ボウルビー(Bowlby, J.)に代表される<sup>1)</sup>。乳児が成人(多くは母親)を安全基地として接近、接触を求めるとよび<sup>2)</sup>、母親に対して抱く愛情を伴う心のシステムを愛着とよぶ。愛着研究の動向は、母親と子どもの関係を外的に捉えられる相互作用から主観的側面を含めた関係性への研究へと発展している<sup>3)</sup>。またハイド(Hinde)<sup>4)</sup>によれば、親は乳児の行動の客観的側面に反応する

以上に、親自身がそれに注入した主観的意味に反応しているという。そして、親が子どもの行動に含まれる意図の要素を過大評価することが、共通した意味のコミュニケーションの基盤を作り、子どもの発達への推進力になるとして、子どもの発達を引き上げる親の主観性を重視している。そこで本研究では「子どもへの愛着形成」について、出産直後の母親の分離された子どもへのおもいに注目し親側の主観的解釈を重視して検証する。

これらのことを踏まえ、本研究では子どもが分娩直後から NICU に入院する母親の子どもに対する愛着形成調査用紙を作成し、その愛着形成過程がどのように変化するのかを調査することを目的とする。また愛着形成過程に母乳哺育がどう関連しているのか確認し、母子への支援方法について示唆を得るものとする。

## II. 調査内容

## 1. 調査対象

E 公立病院で出産し子どもが NICU に入院した母親で、研究の趣旨に賛同し了解が得られた者 33 名。出生時に児に重篤な疾病のある者は対象者から除いた。

## 2. 調査期間

2003 年 6 月 5 日～11 月 30 日

## 3. 調査方法

出産後 1 ヶ月の間に 3 回、作成した質問紙を用いて

無記名自記式質問紙調査を実施した。調査内容は①属性(初・経産婦別, 年齢) ②子どもへの愛着形成(37項目) ③現在の母乳状況。調査用紙の記入は産褥1日目(以下1日目とする)と産褥5日目(以下5日目とする)および1か月検診時(以下30日目とする)に行った。産褥1日目のオリエンテーション終了後に調査についての説明を行った。3回とも内容の同じ質問紙を配布し, 産褥1日目と5日目には記入後に病棟の回収箱にそれぞれ投函するようお願いした。1か月検診時には外来回収箱に投函あるいは郵送にて送付するようお願いした。

#### 4. 質問紙の作成

母親の児に対する感情や愛着形成の程度については, 花沢<sup>5)</sup>の対児感情評定尺度があるがこれは母親が児に抱く感情の一般的様相を測る尺度である。大日向<sup>6)</sup>も愛着尺度は, 児に対して特有の愛着のみ計るためのものではなく夫など児以外の人との一体感も計れる尺度となっている。また, 母親の愛着形成尺度にミュラー(Muller)が尺度開発を行っており, 日本語版が中島<sup>7)</sup>によって作成されている。これは乳児に対する母親の愛着を情意領域から定義した尺度である。しかし母子分離を経験した母親特有の子どもに対する感情や愛着を示す尺度はなく母親の側で援助するものが分娩直後から使用できる尺度は作成されていない。そこで花沢の対児感情尺度, 大日向の愛情尺度, 中島の母親の愛着尺度日本語版を参考に分娩後早期に母子分離された母親特有の子どもに対する感情や愛着に関する質問項目を抽出し, 子どもがNICUに入院する母親の児に対する愛着形成に関する質問紙を作成した。質問項目は逆転項目8項目を含む37項目で成り, 評定を4件法で求め得点が高いほど愛着形成が高くなるように設定した。

#### 5. 分析方法

1) 「子どもへの愛着形成」の質問紙について質問紙全体のCronbach's  $\alpha$ 係数を求めた。

2) 「子どもへの愛着形成」について逆転項目8項目は評定値を算出する際に逆転値として算出した上で各項目の平均評定値とSDを求めた。1日目, 5日目および30日目の得点について1要因の分散分析をおこなった。さらに, 群間に有意差がみられた項目に対して, Tukey法で多重比較を行った。

3) 授乳形態を①直接に母乳のみを与えている者, ②直接に母乳を与えていない者に分類し, 直接に母乳のみを与えている群を「直接授乳ができる群」, 直接に母乳を与えていないものを「直接授乳ができない群」とし, 5日目と30日について2群間でMann-WhitneyのU検定をおこなった。

結果の集計と分析には統計パッケージSPSSバージョン

11.5を使用し, 有意水準は5%以下とした。回答をもって同意とみなした。

#### 6. 倫理的配慮

対象者に調査の趣旨を伝え, 研究参加は自由であり, データの扱いについては個人が特定されず調査終了後すみやかに破棄する旨の内容の文書を質問紙に添付し配布した。

### III. 研究結果

#### 1. 対象者の特徴

1) 初・経産婦別: 初産婦23名, 経産婦10名の計33名

2) 平均年齢  $31.00 \pm 5.13$  歳

3) 現在の母乳状況: 5日目に直接授乳ができる23名, 直接授乳が出来ない8名, 不明2名

4) 子どもについて

単胎27名, 双胎4組, 不明2

出生時の体重: 最高値573g, 最大値3401g 平均体重は  $2051.00 \pm 591.41$  g (図1)

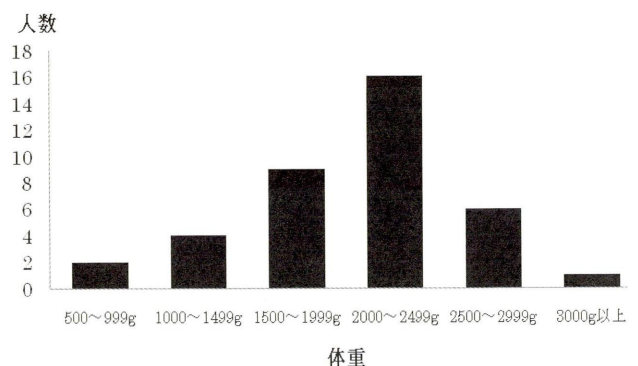


図1 子どもの出生時体重

#### 2. 「子どもへの愛着形成」について

##### 1) 質問紙の信頼性

「子どもへの愛着形成」について質問紙全体のCronbach's  $\alpha$ 係数は0.90であった。

##### 2) 「子どもへの愛着形成」の経日比較

各項目の1日目, 5日目および30日目の平均評定値と標準偏差及び1日目, 5日目および30日目の評定値の比較を(表1)に示した。一要因の分散分析の結果, 有意差のあった項目は6項目であった。「26. 赤ちゃんが自分に甘えているような気がするがありますか」[ $F(2, 98)=9.45, p<0.05$ ]「27. 赤ちゃんが自分に話しかけてきそうな気がしますか」[ $F(2, 98)=1.43, p<0.05$ ], 「28. 赤ちゃんがおなかをすかせているように感じるがありますか」[ $F(2, 98)=7.35, p<0.05$ ], 「29. 赤ちゃんが便や尿

表1 子どもへの愛着形成項目と経時的変化

N=33

質問項目 (斜体は逆転項目)	1日目		5日目		30日目		有意差
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
1 赤ちゃんを初めてみたときかわいいとおもいましたか	3.76	0.50	3.82	0.39	3.79	0.70	n.s.
2 赤ちゃんを初めてみたときショックから立ち直れていないと感じていますか	3.61	0.86	3.70	0.68	3.85	0.36	n.s.
3 今、赤ちゃんをかわいいとおもいますか	3.85	0.44	4.00	0.00	3.91	0.52	n.s.
4 赤ちゃんをみて気が動転したり、失いかけたことがありますか	3.79	0.55	3.70	0.68	3.73	0.63	n.s.
5 赤ちゃんると優しい気持ちになれますか	3.94	0.24	3.91	0.29	3.97	0.17	n.s.
6 出産後すぐに面会にいきたいとおもいましたか	3.85	0.44	3.85	0.44	3.88	0.42	n.s.
7 赤ちゃんを産んだショックから立ち直れていないと感じていますか	3.70	0.73	3.76	0.66	3.82	0.53	n.s.
8 赤ちゃんの調子が改善した点を告げられ安心できるようになりましたか	3.50	0.88	3.82	0.46	3.79	0.42	n.s.
9 赤ちゃんに直接触れられ安心できますか	3.82	0.58	3.88	0.42	3.97	0.17	n.s.
10 赤ちゃんを傷つけそうで触ることができませんか	3.45	0.79	3.45	0.79	3.52	0.91	n.s.
11 赤ちゃんを産んだことで母親になったことを実感しますか	3.58	0.71	3.79	0.48	3.76	0.66	n.s.
12 赤ちゃんを産んだことで母親になった喜びを感じますか	3.79	0.48	3.91	0.29	3.85	0.36	n.s.
13 赤ちゃんといると自分の子供だという実感がもてますか	3.85	0.44	3.85	0.36	3.85	0.57	n.s.
14 赤ちゃんに愛撫したり触ったりするのが楽しいですか	3.79	0.65	3.88	0.55	3.97	0.17	n.s.
15 赤ちゃんに話しかけるのが楽しいですか	3.88	0.55	3.82	0.58	3.97	0.17	n.s.
16 赤ちゃんをじっとみている時間が楽しいですか	3.88	0.55	3.85	0.44	3.85	0.57	n.s.
17 赤ちゃんのことが身近に感じられますか	3.58	0.71	3.70	0.64	3.91	0.38	n.s.
18 赤ちゃんは弱々しくて不安定な存在だと感じますか	3.03	0.93	2.94	1.06	2.94	1.12	n.s.
19 赤ちゃんけなげに生きようとする生命力のあふれた存在だと感じますか	3.91	0.30	3.97	0.17	4.00	0.00	n.s.
20 赤ちゃんのそばにいつまでもいたいと思いますか	3.88	0.42	3.88	0.55	3.82	0.39	n.s.
21 赤ちゃんが小さくて触れないと感じることがありますか	3.34	0.87	3.45	0.94	3.67	0.69	n.s.
22 赤ちゃんのためなら何でも出来そうな気がしますか	3.78	0.49	3.94	0.25	3.85	0.36	n.s.
23 赤ちゃんの将来について不安を感じていますか	2.47	0.98	2.64	0.96	2.70	1.02	n.s.
24 赤ちゃんの調子の良い点を告げられ安心できますか	3.75	0.62	3.82	0.46	3.88	0.33	n.s.
25 赤ちゃんは元気に育っていると感じられますか	3.75	0.62	3.88	0.33	3.85	0.36	n.s.
26 赤ちゃんが自分に甘えているような気がするがありますか	2.84	0.85	3.06	0.90	3.67	0.60	1日目<30日目 5日目<30日目
27 赤ちゃんが自分に話かけてきそうな気がしますか	3.06	0.76	3.33	0.82	3.64	0.49	* 1日目<30日目
28 赤ちゃんがお腹をすかせているように感じるがありますか	2.94	0.91	3.00	1.03	3.67	0.54	* 1日目<30日目 5日目<30日目
29 赤ちゃんが便や尿をしているように感じるがありますか	2.31	1.00	2.85	1.06	3.48	0.83	* 1日目<30日目 5日目<30日目
30 赤ちゃんを見て涙を流すことがありますか	2.42	1.00	2.42	1.03	2.76	1.00	n.s.
31 赤ちゃんに対し微笑みかけることが多いですか	3.70	0.68	3.73	0.52	3.85	0.36	n.s.
32 よその子どもでも微笑みかけている自分に気づくことがありますか	3.06	0.83	3.06	0.93	3.36	0.65	n.s.
33 赤ちゃん顔を見合わせるがよくありますか	2.97	0.88	3.06	0.93	3.58	0.66	* 1日目<30日目 5日目<30日目
34 赤ちゃんに自分から刺激することはありますか	2.79	1.05	3.22	0.87	3.58	0.66	* 1日目<30日目
35 赤ちゃんに自分から声をかけることがありますか	3.64	0.70	3.59	0.71	3.82	0.39	n.s.
36 赤ちゃんに会いに行こうとして引き返したことがありますか	3.73	0.76	3.61	0.86	3.91	0.58	n.s.
37 他の人と一緒に赤ちゃんに面会にゆきたいとおもいますか	3.42	1.00	3.21	0.93	3.33	0.89	n.s.
合計	128.38	25.77	131.33	23.50	136.70	19.65	* 1日目<30日目 5日目<30日目

\* P<0.05

斜字体は逆転項目

一元配置分散分析、Tukey法

をしているように感じるがありますか」  
 [F(2, 98)=11.91, p<0.05] , 「33. 赤ちゃんと顔を見合わせることでよくありますか[F(2, 98)=5.058 p<0.05]」, 「34. 赤ちゃんに自分から刺激をすることがありますか[F(2, 98)=6.68 p<0.05]」の6項目において群内に有意差が認められた。有意差の認められた項目について多重比較を行った結果、1日目と5日目には有意差は認められなかった。「26. 赤ちゃんが自分に甘えているような気がするがありますか」

「27. 赤ちゃんが自分に話しかけてきそうな気がしますか」, 「28. 赤ちゃんがおなかをすかせているように感じるがありますか」, 「29. 赤ちゃんが便や尿をしているように感じるがありますか」, 「33. 赤ちゃんと顔を見合わせることでよくありますか」, 「34. 赤ちゃんに自分から刺激をすることがありますか」の6項目すべてにおいて1日目と30日目の間有意差が確認され、30日目が有意に高い値を示した。5日目と30日目の間に有意差がみられた項目は「26. 赤ちゃんが自分に甘えているような気がするがありますか」「28. 赤ちゃんがおなかをすかせているように感じるがありますか」「29. 赤ちゃんが便や尿をしているように感じるがありますか」「33. 赤ちゃんと顔を見合わせることでよくありますか」の4項目で30日目に有意に高い値を示した。

### 3. 直接授乳と「子どもの愛着形成」の関連

5日目と30日目の「直接授乳ができる群」と「直接授乳ができない群」について「子どもへの愛着形成」の総評定値を比較した結果(表2)に示した。

表2 直接授乳と「子どもの愛着形成」との関連

調査日	直接授乳ができる n=23		直接授乳ができない n=8		有意差
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
5日目	135.29	7.09	122.75	15.03	*
30日目	136.83	8.50	136.13	7.88	n.s.

\*P<0.05

Mann Whitney U検定

5日目の「子どもへの愛着形成」は、「直接授乳ができる群」と「直接授乳ができない群」を比較した結果、「直接授乳ができる群」に有意に高い値が示された(Z=-2.30, P<0.05)。30日目ではZ=-0.34で有意差は認められなかった

## IV. 考察

### 1. 対象の特徴について

#### 1) NICUに入院した児について

子どもの出生体重は2002年にE病院に入院した子

どもの体重<sup>8)</sup>と比較すると今回の調査対象は著しい偏りのある群とはいえない。その内容は次のとおりである。1000g未満の入院した子どもは全体の5.2%で調査対象は全体の5.3%であった。1000g~1499gの入院した子どもは全体の7.5%で調査対象は全体の10.5%であった。1500g~1999gの入院した子どもは全体の13.7%で調査対象は全体の23.7%であった。2000g~2499gの入院した子どもは全体の31.6%で調査対象は全体の42.1%であった。2500g~3000gの入院した子どもは全体の18.1%で調査対象は全体の15.8%であった。3000gの入院した子どもは全体の23.8%で調査対象は全体の2.6%であった。他県の周産期センターとの比較は県毎に他の小児病院との関連で未熟児の受け入れシステムが決定されるため他県の周産期センターとの比較は行わなかった。

本調査の対象は、NICUに子どもが入院した場合分娩後早期から母体に対し母乳哺育についてのケアと指導を受けている。子どもの状態で初乳を児にあたえられなくても冷凍しておくことで成分に変化なく後からあたえることもできるため、基本的に分娩後2時間から5時間以内を目処にケアや指導を実施されている。これらのことより基本的に入院中の母親に対しては児の状態に関わらず早期より母乳哺育についての関わりが行われていると考え児の体重以外、児の状態について今回は詳細に区分しなかった。

#### 2) 母親について

調査対象の属性は調査病院の群に著しい偏りはない。その内容は、初産婦23名、経産婦10名の計33名、平均年齢31±5.13歳でありNICUに入院した他の母親群のデータは不明であるが、同時期の母子同室をした群での属性を調査した結果と比較したところ、初産婦77名、平均年齢28.3±4.5歳、経産婦94名、平均年齢30.8±4.4歳の群とその他の群にくらべ著しい偏りはないといえる。

#### 2. 「子どもへの愛着形成」評定項目について

「子どもへの愛着形成」評定項目については質問紙全体のCronbach's α係数0.90は非常に高く内容の一貫性があり信頼性が高いことが示された。

「子どもへの愛着形成」の平均評定値はいずれも産褥1日目よりほぼ2.5以上を示し高い愛着形成を示していた。一要因の分散分析の結果有意差が認められた項目は6項目あり、「26. 赤ちゃんが自分に甘えているような気がするがありますか」、「27. 赤ちゃんが自分に話しかけてきそうな気がしますか」、「28. 赤ちゃんがおなかをすかせているように感じるがありますか」、「29. 赤ちゃんが便や尿をしているように感じるがありますか」、「33. 赤ちゃんと顔を見合わせることでよくありますか」、「34. 赤ち

んに自分から刺激をすることがありますか」であった。その内容は子どもに対するかわいいと感じるように主観的な愛着感情を表しているものや、赤ちゃんに面会に行けるか、など具体的な心配を表す項目であった。橋本<sup>9)</sup>は低出生体重児と親における関係性発達モデルのなかで、行動レベルでの“相互作用の変化”は“親の行動”として観察されると述べており本研究対象の母親の行動の変化が相互作用を進展させている証であることを示唆している。危機的な出来事であろう未熟児の出産を、調査対象群の母親は産後早期より乗り越えはじめ徐々に児への愛情や関心を示していったと考えられる。

多重比較をした結果、1日目と30日目の間に有意差がみられた6項目は「26. 赤ちゃんが自分に甘えているような気がするがありますか」、「27. 赤ちゃんが自分に話しかけてきそうな気がしますか」、「28. 赤ちゃんがおなかをすかせているように感じるがありますか」、「29. 赤ちゃんが便や尿をしているように感じるがありますか」、「33. 赤ちゃんの顔を見合わせるがよくありますか」、「34. 赤ちゃんに自分から刺激をすることがありますか」であり、そのうち「26. 赤ちゃんが自分に甘えているような気がするがありますか」「28. 赤ちゃんがおなかをすかせているように感じるがありますか」「29. 赤ちゃんが便や尿をしているように感じるがありますか」「33. 赤ちゃんの顔を見合わせるがよくありますか」の4項目は5日目と30日目の間に有意差が認められた。このことから、子どもの感情を推測したり、子どもの世話に関心を向けるなど、すなわち今後の育児に発展していく項目は1ヶ月をかけて徐々に高まっていることが明らかになった。また、1日目と30日目のみ有意差が認められた2項目からは、さらに積極的に子どもとの関係を深めようとする内容が示されていた。これらの結果をみても、早期に培われた児への肯定的感情が日を追って高まっていることがわかる。そして退院時期を過ぎて子どもの感情を推察できたり、子どもの世話に今後影響する育児に関わる積極的関心、子どもと顔を見合わせるという自分と子どもとの相互作用の内容が含まれていた。橋本<sup>10)</sup>は未熟児と親における関係発達モデルについて述べる中で母子の相互作用の変化はまず親行動として観察されるという。分娩直後、母親は『我が子』として認識するのが困難な段階から「生命ある存在」「反応しうる存在」さらに「相互作用しうる存在」と認知しその後「互恵的な相互作用」への過程をたどるといふ。調査対象の母親は分娩直後から分離を経験したにもかかわらず、1か月で相互作用に関する項目まで移行できていることが明らかになった。また母親が子どもの健康状

態に影響のない方法で母親の退院時ごろより子どもの世話に参加する機会をもつことは有効な支援方法であることが示唆された。

### 3. 直接授乳と「子どもへの愛着形成」の関連について

直接授乳ができる群と直接授乳ができない群で「子どもへの愛着形成」の総評定値を比較したところ、5日目の直接母乳ができる群の得点が有意に高かった。このことより直接母乳を行った者は産褥早期からの子どもへの愛着形成を促がす効果があるといえる。昨今、母と子の皮膚接触(SSC; skin to skin contact)の効果が報告されている<sup>11)</sup>。母乳が維持されている場合カンガルーケアすなわち、赤ちゃんを母親の乳房の間に抱いて裸の皮膚と皮膚を接触させながら哺育する、カンガルーケアにおいてSSCにより児の皮膚にコロニーを形成した細菌に対して母体側で抗体が産生され母乳を介して児の感染防御機構が成立する可能性が推測されている。<sup>12)</sup>そのような一般的な母乳哺育の効果に加え、先行研究<sup>13)</sup>にある超未熟児に対する早期授乳の安全性、愛着形成を促すという症例研究、染野<sup>14)</sup>による研究結果である超低出生体重児への直接授乳は母親の愛着形成を促進するという質的研究の結果を裏付けるものとなった。今回の結果より直接授乳が母親に与える影響は直接授乳群に母乳への自信についても、子どもへの愛着形成についても肯定的結果が得られた。このことは母子分離を経験した母親にとって、成熟児に比べ哺乳が困難な未熟児に直接母乳をあたえることは多大な努力を要するにも関わらず母乳を直接吸わせるという行為そのものが、児への愛着形成を高めることが明らかになり、このことは子どもと分離された母親が心理的な危機状態を乗り越える場合注目すべきことである。母子分離を経験した母親や、子どもとの接触を制限されたままの母親でも直接母乳を子どもの状態が可能なかぎり積極的にとり入れることが重要であることが示唆された。また直接授乳ができない群の母親も、30日目の愛着形成においては直接授乳できる群と変わりがなく、時間をかけて愛着形成を培っていることが推察できる。このことは、出産後に母子分離を体験している母親の精神的サポートの方法について示唆しており、たとえ直接授乳ができなくても時間をかけてゆっくと愛着形成を促すことができるような関わりが必要であることが判明した。

## V. 研究の限界と今後の課題

今回の子どもへの愛着形成は、子どもにとっての発育を引き上げる可能性をもつといわれる母親の主観性を重視する立場から母親の愛着形成過程を探っていた。

今回の研究では子どもの状態や子どもとの接触の多寡など、母が子に関わる度合いを研究内容に加味できなかった。研究対象人数の少なさの結果でもあるが今回の研究の限界であった。今後は対象人数を増やし子どもの状態や母子の接触度合いも含めた研究をすすめていきたい。

## VI. 結語

分娩直後から子どもが NICU に入院する母親を対象に、産褥1日目、5日目、30日目の母子分離を経験する母親は子どもとの自由な早期接触を阻まれ状態で母親の「子どもへの愛着形成」はどう育まれていくのかを明らかにし、子どもへの愛着過程に直接哺育がどう関連しているのかを明らかにした。

1) 「子どもへの愛着形成調査票」の信頼性が得られて、「子どもへの愛着形成」のうち子どもの感情を推測することや子どもの世話に関心を向けることは1か月をかけて徐々に培われている。また母子の相互作用に関する行動についても1か月後には高まっていることが明らかになった。しかしその推移の詳細は今後、調査対象を増やし再度の調査も必要と考える。

2) 直接授乳は産褥早期の子どもへの愛着形成を促す効果があることが判明した。

## 謝辞

本研究にあたり、調査にご協力いただきました対象者の皆様、快く調査にご協力いただきました病院や周産期センターのスタッフの皆様に深謝いたします。

## 文献

- 1) ジョージ・バターワース(村井潤一監訳)：発達心理学の基本を学ぶ, ミネルヴァ書房, 29-33, 2002
- 2) 岩川淳他, 子どもの発達臨床心理, 昭和堂, 66-73, 2002
- 3) 遠藤利彦: 心理学概論, Vol. 35, No. 2, 201, 1992
- 4) 遠藤利彦: 心理学概論, Vol. 35, No. 2, 209, 1992
- 5) 花沢成一: 対児感情評定尺度, 母性心理学, 241, 2001
- 6) 大日向雅美: 母親の子どもに対する愛着—夫に対する愛着との関連性について—, 母性の研究, 川島書店, 199-244, 1990
- 7) 中島登美子: 母親の愛着形成尺度日本版の信頼性・妥当性の検討, 日本看護科学会誌. Vol. 21, No. 1, 1-8, 2001,
- 8) 愛媛県立中央病院入院統計, 周産期センター新生児部門, 2002
- 9) 橋本武夫監修: もっと知りたい母乳育児, NEONATAL CARE 増刊号, メディカ出版, 239, 2000
- 10) 橋本洋子: 未熟児の親への援助, 母子保健情報, 第33号, 1996, 24-28
- 11) 市橋寛: 超出生体重児における超早期授乳, Neonatalcare, Vol. 13No. 12, 1294-1297, 2002
- 12) 瀬川雅史: 低出生体重児になぜ母乳が必要か, Neonatalcare Vol. 16No. 12, 1062-1068, 2003
- 13) 堀内勁: カンガルーケア, メディカ出版, 25, 1999
- 14) 染野由美子ら: 超低出生体重児の直接哺乳と母親の愛着形成の変化, 27 回小児看護, 73-76, 1996

## Development of feelings of attachment by mothers whose newborns are hospitalized in a neonatal intensive care unit (NICU)

Norimi Takata<sup>1)</sup> Hisa Nomoto<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> Ehime Prefectural Central Hospital

<sup>2)</sup> Ehime University, Faculty of Nursing and Sciences, School of Medicine

### Abstract

The present study aimed to reveal how feelings of attachment are developed in mothers whose newborns are hospitalized in a neonatal intensive care unit (NICU) immediately after delivery, and how breast-feeding is involved in the process of the development of feelings of attachment. The survey was conducted from June 5 to November 30, 2003. Subjects were 33 mothers, whose newborns were hospitalized in a NICU, and who consented to participate in the survey upon agreeing with the goals of the present study. An anonymous, self-administered questionnaire survey was conducted on days 1, 5, and 30 after delivery. The survey contents included questionnaire items on attributes, “development of feelings of attachment towards the child” in mothers whose newborns were hospitalized in NICU (37 items), and current lactation conditions.

The survey results revealed that positive feelings of attachment towards the newborns were gradually cultivated in mothers over a one-month period.

It was found that there was a gradual enhancement especially in a positive frame of mind regarding attempts to understand the emotions of the newborn and regarding childcare and positive behaviors for establishing interaction between the mother and newborn gradually increased over a month after discharge of the infant from the hospital.

Furthermore, the relationship between the “development of feelings of attachment towards the child” and lactation conditions was investigated, and it was suggested that breast-feeding promoted the development of feelings of attachment toward the newborn.

Keywords: NICU; mother; early puerperium; development of feelings of attachment; breast-feeding

